

ユーゴスラヴィア内戦をめぐる西欧知識人の応酬 —ペーター・ハントケ『冬の旅』に対する議論を中心に—

國 重 裕

1999年4月29日、チェコ大統領ヴァーツラフ・ハヴェルはカナダの議会で演説を行った。その場でハヴェルは「国益(national interests)」と、それより高次の「人権という原則(principle of humanrights)」の区別について語った。ポーランドやハンガリーとともにNATOに加盟したばかりのチェコの大統領は、冷戦終結を境として「国民国家」は解体に向かい、国境を越えた「人権」の概念こそ新しい時代の政治の理念たるべきだ、と持論を披露し、人権は各国の国益に優先すると結論づける。そして、その年の3月に始まった「ジェノサイドを遂行するスロボダン・ミロシェヴィチ政権」に対するNATO軍の空爆を正当化するのである。ハヴェルは言う、「この戦争は、国益のためにではなく、原則と価値の名のもとに行われるおそらくはじめての戦争であろう。」また「この戦争で示されたものとは、人権とは分割できないものであり、一人に不正が行われた場合には、それは全員に対してなされたのと同じである、という事実である。」さらに「これは未来への重要な前例となるだろう」とも述べた。¹ 人権は各国の法の上に位置付けられるものであるがゆえに、著しい人権侵害にさらされている人々が存在する国(この場合セルビア)に対して、その国家の主権を侵してでも攻撃することが許される、というのがハヴェルの論理だ。

これに対して、スロヴェニアの哲学者スラヴォイ・ジジェクは「ヴァーツラフ・ハヴェルの哀れなケース」という皮肉たっぷりのタイトルを冠したエッセイを著し、かつての反体制派知識人の演説を批判した。² ジジェクによれば「ハヴェルの議論で問題なのは、この軍事介入が憎しみや暴力の犠牲者のために行われた、と説明されている点にある。つまり普遍的な人権に対する脱政治化されたアペールによって正当化された点だ。」

ジジェクの批判の道筋をたどってみよう。『ニューヨーク・タイムズ』の5月号に、コソヴォのアルバニア

¹ Václav Havel: *Kosovo and the End of the Nation-State*. Translated from the Czech by Paul Wilson. 引用は New York Review of Books, 10. June 1999 に掲載されたハヴェルの演説原稿による。

² Slavoj Žižek: *The sad case of Václav Havel*. In: London Review of Books, 28 October 1999. このタイトルは表紙に付されたもので、本文は Attempts to Escape the Logic of Capitalism と題された、ハヴェルの伝記(John Keane: Václav Havel: A Political Tragedy in Six Acts)に対する書評のかたちをとっている。

ア人難民である老婆の言葉が紹介されている。老婆は言う、「わたしにとってコンソヴォの独立なんてどうでもいい。わたしはこんな状態が終わってくれさえすればいいのさ。わたしの土地で、わたしの家で、友達や家族と幸せに暮らせるようになれば。」このような老婆の証言こそNATOの空爆を正当化する絶好の材料となる。なぜなら慈善的な外国の力をもってしか止めることのできない地域紛争に巻きこまれた無力な難民＝犠牲者を助けるという大義名分の方が、何かしらの政治的グループ(主体)を援助するよりも、「人道的介入」に好都合だからである。しかしハヴェルが人権擁護を普遍化していくとき、犠牲者と加害者もまた具体的な顔を失う。この点が、ガンディーやマーチン・ルーサー・キングの抵抗運動と大きく異なっている。後者の場合、具体的な行為(植民地主義、人種差別)に向けられたものであって、特定の人間に向けられたものではなく、また「敵」の排斥を目ざすものでもなかった。共産党政権下において、抽象的理念にもとづいた反体制運動——しばしば西側の左翼に見られた——の危うさをあれほど熟知していたはずのハヴェルが、冷戦終結後のグローバリズムのなかで、自らを失ってしまった。——以上のように、ジジェクの論点を整理できる。

ユーゴスラヴィアの解体に伴う内戦においてほど「人権」という概念が声高に叫ばれたことはないだろう。ぼくがここでハヴェルの例を引き合いに出したのは、けっして彼の変質をあげつらうためではない。この戦争において、いかにメディアの振り撒く哀れな犠牲者の映像が「人権」という崇高な、しかし抽象的な概念へと直結され、人々の行動を左右したかを示すためである。

＊

1991年6月、スロヴェニアとクロアチアが一方向的にユーゴスラヴィア社会主義連邦共和国からの独立を宣言する。これを契機にユーゴ連邦軍と各共和国の軍隊——現実には軍隊といえるほどの装備もまだ有していなかった——とのあいだで戦闘が勃発する。人口のほとんどをスロヴェニア人だけでしめるスロヴェニア共和国の場合、戦闘は十日間で終結し、連邦軍がスロヴェニアから撤退するというかたちで解決したが、クライナ地方や東スラヴォニア地方に多くのセルビア人住人を抱えるクロアチアでは戦闘は長期化した。戦闘が激化した背景にはユーゴ特有の事情もあった。バルカン半島では各家族が銃を所有することが伝統であっただけではない。第二次世界大戦中のパルチザン闘争の経験、さらに冷戦下において独自の社会主義路線を歩んだユーゴでは、ワルシャワ条約機構軍の侵攻に備えて国内各所に武器庫を配置していた。このことが地域紛争の域を越えた文字通りの戦争へ発展する要因となった。クロアチアにおける戦争は、装備の貧弱なクロアチア共和国軍に対して、戦争のノウハウを知り尽くしたユーゴ連邦軍——実質的にセルビア人が将校に占める割合は高かった——に支援されたセルビア人勢力の勝利で、いったん小康状態を保った。しかし翌1992年3月、今度はボスニア・ヘルツェゴビナが独立を宣言すると、戦火はボスニアへ飛び火する。ボスニアに居住するムスリム人、セルビア人、クロアチア人が三つ巴の戦いを展開する。火力で他を圧倒するセルビア人勢力は優位に戦闘を進め、首都サラエヴォは包囲され、以降数年にわたって激しい砲火にさら

されることになった。1995年になって、その間武器を買い貯めていたクロアチア共和国軍は「電撃作戦」を開始、領内のセルビア人地区を一気に制圧、また国際世論を受けて国連は停戦合意不履行を理由にボスニアのセルビア人勢力に対して限定空爆。1995年11月 Dayton 合意が成立するまでのこの戦争の犠牲者の数は測り知れない。1998年に入るとセルビア共和国内のコソヴォ自治州で「コソヴォ解放軍」とセルビア治安部隊の戦闘が激しさを増す。ユーゴ政権が和平案を拒否し続けるなかで翌1999年3月からNATO軍のユーゴへの空爆が開始される。

はなはだ簡略ではあるが、ユーゴスラヴィア内戦の経過をまとめると以上の通りである。91年にスロヴェニア、クロアチア両国が独立を宣言したときドイツ、オーストリアを除けば、EU諸国は独立承認に消極的だった。また内戦勃発当時、フランスやイギリスは19世紀以来の歴史的経緯からセルビアに同情的だった。アメリカの世論は、クロアチアにせよボスニアにせよ、無関心である前にそもそもまったく無知だった。

それなのにミロシェヴィチ＝ファシスト独裁者、セルビア＝悪の帝国というイメージが急速に定着していく過程には、メディアの操作があったことも、今日ではよく知られている。とりわけアメリカの大手PR会社ルーター・フィン社は巧みに世論形成を行っていった。³そしてボスニア内戦において、セルビア人が侵略者であり、ムスリム人は犠牲者であるという印象を決定づけるために用いられた言葉が「民族浄化(ethnic cleansing)」であった。この言葉のものは、第二次大戦中クロアチア独立国時代にクロアチア人とセルビア人が血で血を洗う闘争を繰り返すなかで行われた *etni ko i cej* の英語訳である。

強制収容所からの生存者の証言などを通して、1992年の夏から秋にはボスニア内戦への、とりわけセルビア人による身の毛もよだつ蛮行への関心が高まっていく。こうしたなかでユーゴの内戦は、たんなる地域紛争ではなく、「セルビアの野蛮に対する西欧の伝統的価値たる民主主義と人権」というイメージがゆるぎないコンセンサスとなる。世論は、正確に言えばメディアに誘導された世論は、日々テレビや新聞が各家庭に送り届けるサライエヴォの惨状、瘦せこけた避難民、おびただしい死体、戦場の映像を目に焼きつけさせられて、これらの惨劇の首謀者セルビア／ミロシェヴィチへの憎悪を昂めていく。

*

本論の目的は、ボスニアでの内戦がいちおうの停戦をみた1996年1月に南ドイツ新聞に掲載されたペーター・ハントケの『セルビアのための正義あるいはドナウ川、サヴァ川、モラヴァ川、ドウリナ川

³ 情報操作については、高木徹『ドキュメント 戦争広告代理店—情報操作とボスニア紛争』（講談社）2002年参照。この本はもっぱらアメリカの状況に焦点を当てている。ドイツを含むヨーロッパにおける情報戦争については、Klaus Bittermann(Hg.): *Serbien muß sterben—Wahrheit und Lüge im jugoslawischen Bürgerkrieg*. 2. Aufgabe. Edition TIAMAT, 1994 を参照のこと。

への冬の旅』⁴ — 以下『冬の旅』と略す — と題した紀行文がまき起こした論争を分析することにある。ハントケの紀行文は発表されるや否や空前の議論を呼び、新聞・雑誌の書評の数は百点を下るまい。だが本論の主眼はハントケの『冬の旅』そのものを解釈することにあるのではない。ユーゴスラヴィア内戦をめぐるたたかわされた西欧での様々な議論の布置のなかにハントケのテキストを置いてみることにある。そうすることによって、冒頭引用したハヴェルの議論が端的に示すように、ユーゴスラヴィア内戦がいかに道徳的・情緒的に語られたか、そうした言論界の空気の中にあつて、何ゆえハントケの短いテキストがあれほどまで物議を醸し、激しいバッシングの対象になったかを明らかにできると思う。

以下、第一章ではハントケが『冬の旅』のなかで名指して批判しているフランスのヌーヴォー・フィロゾーフ達が、ユーゴスラヴィア内戦について行った発言を、とくにクストリツァ監督の映画「アンダーグラウンド」をめぐる論争を例に検証する。そして第二章ではハントケの『冬の旅』に対してどのような批判が提出されたのかを、二人の旧ユーゴ出身の議論を中心に分析する。

1. エミール・クストリツァ監督「アンダーグラウンド」をめぐる議論

1995年サライェヴォ出身の映画監督エミール・クストリツァ(1954～)が五作目の長篇にあたる「アンダーグラウンド」を発表し、この作品がカンヌ映画祭でパルム・ドールを獲得するや、この作品への毀誉褒貶がわきおこった。この章では、ヌーヴォー・フィロゾーフを代表する論客であるアラン・フィエルクロート、アンドレ・グリュックスマン、ベルナール＝アンリ・レヴィの映画評を紹介しながら、その争点を検証し、さらに1995年10月26日付の『ル・モンド』紙上の「アンダーグラウンド」特集記事を紹介する。

この映画を取り上げる根拠は、ハントケがセルビアへと旅立つ前日、「アンダーグラウンド」を観ていて、件の旅行記の中で比較的詳しく論及しているからである。ハントケは「アンダーグラウンド」に感銘を受ける。それまでのクストリツァ作品では、この現実世界との結びつきが弱く、そのためときとして「妄想の視覚的渋滞」に陥っていたが、「夢みることへの並外れた才能ゆえ、世界の手にとりまかせることができる一部 — つまりかつてのユーゴスラヴィア — や歴史と結びついているゆえに物語が勢いを持つことになった⁵」と評価する。それにつづけて『アンダーグラウンド』に対して書かれたものの多くは、

⁴ Peter Handke: *Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morava und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien*. Suhrkamp Verlag, 1996. このテキストは南ドイツ新聞1996年1月5/6日合併号および1月13/14日合併号に掲載された。この時は編集者の意向により『セルビアの正義』をタイトルされたが、単行本にするにあたって本題と副題が入れ替えられた。

⁵ ibid. S.22f.

なんとくだらなく悪意に充ちたものだったものだったろう⁶」と、上述の哲学者たちをなで斬りにしていく。まずフィンキルクロートについて「戦争が勃発してからというもの信じられないおしゃべり屋アラン・フィンキルクロートは、クストリツァの映画を観ることなしに、『ル・モンド』で、この映画をテロだの親セルビアのプロパガンダだのと批判している。⁷」アンドレ・グリュックスマンは『リベラシオン』紙で「テロ主義のセルビア共産主義の清算を果たしたものとして祝辞を述べている⁸。」そして『ル・モンド』紙を「デマゴギーだらけのハイエナ根性新聞」とこき下ろす。

ハントケのこれらの批判が妥当なものか、以下具体的に当該の批評を紹介しながら検討してみたい。

1. 1 アラン・フィンキルクロートの議論

フィンキルクロートの立場は明瞭である。クロアチア内戦が⁹はじまってまもない1991年10月4日には『ル・モンド』紙に「ユーゴスラヴィア 言葉と戦争」と題した次のような文章を寄せている。¹⁰

クロアチアは、妬みから日々繰り返される内戦の劇場などではない。軍事侵攻の舞台なのだ。海軍、ミグ戦闘機、戦車、大砲。これらを有しているのは片方の側、すなわち「連邦軍」だけだ。

しかしこの軍は連邦軍ではなく、実際は共産主義者の軍であり、イデオロギーを温存し、セルビア人が将校の多数を占める。彼らが戦っている相手はウスタシャではない。自らの運命の主たろうと決意したクロアチア人の民主的決定に対して戦いを挑んでいるのだ。敵の政府にこれ以上補助金を出すことを拒み、ヨーロッパという共同体のなかで独立国家を打ち立てようとするクロアチア人の決定に対して。

「わたしの議論は政権の問題ではなく、権利をめぐるものです。すなわち独立と主権を有したクロアチア人の権利について問題にしているのです。旧ユーゴスラヴィアにおいて各共和国に独立よりほかの選択肢をなくさせたのはセルビア人の方です。それにクロアチアの政治にいくらか問題があるにせよ、両者がシンメトリー構造であるとはけつていえないはずです。セルビアがクロアチアに対して戦争を仕掛けたのであって、その逆ではありません。クロアチアとスロヴェニアが提案した国家連

⁶ *ibid.*, S.23.

⁷ *ibid.* S.23.

⁸ *Ibid.* S.24.

⁹ *Ibid.* S.25.

¹⁰ Alain Finkielkraut: *Yougoslavie Les mots et la guerre*. In: *Le Monde*, 4. octobre 1991.

合をセルビアが受け入れていたなら、戦争は起きなかったでしょう。クロアチアは独立を望んだだけで、戦争を望んだわけではない。セルビア人は戦争をすることしか考えない。¹¹」バーゼル新聞のインタビューに対してもこう回答するフィンキルクロートの立場は明らかであろう。

このような鮮明なクロアチア支持のフィンキルクロートは、「アンダーグラウンド」を「クストリツァのペテン」と断言して憚らない。カンヌ映画祭受賞直後、6月2日付の「ル・モンド」に掲載された記事は彼のイデオロギーを端的に示している。

観客は総立ちでユーゴスラヴィアの50年を描いたクストリツァのフレスコ画「アンダーグラウンド」に拍手喝采を送った。審査員はカンヌ映画祭のグランプリをクストリツァに授与した。まさにこれ以上ない一石二鳥というものだ。審査員たちは並外れた才能に恵まれた芸術家を祝い、一方で、熱狂した観衆と審査員はトゥヅラの虐殺への怒りや、戦争の犠牲者への連帯を示せた、というわけだ。彼らがサライェヴォ出身の映画監督に捧げたオマージュは、当然のごとく彼の同胞たるムスリムにまで及ぶのだから。彼らは「美的要求」と「政治的緊急性」といふしばしば矛盾する二つの提言命法を結婚させた。(中略)

しかレクストリツァが映画のなかで行ったことは、人殺しどもが他人を、そして自分を説得しようとするあの言説に他ならない。この常軌を逸した言動を繰り返す映画監督は、つまり民衆を飢餓に追い込む包囲軍[セルビア軍]のステレオタイプな議論を全額自分の口座に振り込んでおきながら、サライェヴォの苦悩を担保にしているのだ。クストリツァは、自らをボスニア人であると見做すことを拒否する。そしてスロボダン・ミロシェヴィチをファシスト呼ばわりしたり、セルビア人を侵略者呼ばわりすることに対して聖なる怒りを示しつつ、拷問の末に殺されたボスニア人をシンボリックに扱う。

「アンダーグラウンド」に賞を与えることでカンヌの審査員はあふれんばかりの想像力の創造者を高く評価した。現実には、審査員はセルビアのイラスト描きと犯罪的な決まり文句の見せかけを賞讃したことになるのだ。彼らが激賞したのは(中略)セルビアのプロパガンダのなかでもっとも支離滅裂で、嘘八百のベオグラード化したヴァージョンにはかならない。悪魔でさえ、ボスニアに対するこんな残酷な侮辱を思いつかずなかっただろうし、あのような西洋的軽薄さと無能さを曝け出したエピローグも考えつきはしなかっただろう。¹²

このような一方的な激しい攻撃に対して、一週間後の6月9日、同じ『ル・モンド』紙にセルジュ・ルグ

¹¹ *Peter Handke oder Die Perversion der Scham*. In: Basler Zeitung, 2. Nov. 1996.

¹² Alain Finkielkraut: *L'impoture Kustrica*. In: Le Monde, 2. juin 1995.

ールの『『アンダーグラウンド』——アラン・フィンキルクロートとジダーノフ』と題する反論が掲載される。¹³「アラン・フィンキルクロートの『クストリツァのペテン』というテキストを読んで、人々の間で怒りと愚弄に意見が分かれ、さらに異議を許さぬ暴言を惹き起こした。」ルグールによれば「彼自身カンヌの会場でクストリツァの映画の受賞を祝った観衆の一人であった——観衆がこの映画に熱狂したのは、類い稀な芸術的創造、金儲け主義が横行するなか映画監督たちによって引き受けられた「文化は例外」という世に知られた概念に、自らのセンスを注ぎ込んだ例外的な映画作品であるがゆえだ、と述べる。『『アンダーグラウンド』は近年の映画の中で最も美しく、もっとも力強く監督された作品である。まさに天才監督による喜びにあふれ輝くような映画だ」とルグールは賞讃を惜しまない。その上で、フィンキルクロートのような芸術を政治的イデオロギーによって測る見方を、スターリン時代の文化相ジダーノフの芸術政策になぞらえ、批判している。

ハントケは、「ル・モンド」の記事は一方向的だと批判しているが、このルグールの記事一つをとってもハントケの批判は当たらないことが分かるだろう。しかし、結論を出すのは後にして、つぎにアンドレ・グリュックスマンのケースを見てみよう。

1.2 アンドレ・グリュックスマン

グリュックスマンは、フィンキルクロートほど露骨でないにせよ、反セルビア、反ミロシェヴィチの立場から、国連のボスニア紛争への介入を要請し続けてきた知識人の一人である。1999年のNATO軍のユーゴ空爆について、こう語る。

1999年3月24日、われわれは攻撃に出た。ブラボー！しかしこれはあまりに遅きに失し、また貧弱なものだった。そんなことをしているからこの十年の間ミロシェヴィチは彼の軍隊を動かし、ユーゴスラヴィアを荒廃させてしまったのだ。最初に殉教者の街となったヴコヴァルが陥落したときにすぐ彼を阻止すべきだった。われわれの行動の遅れは20万人ものボスニア人の死者という高い支払いになった。(中略)民族浄化は肉体だけでなく魂にも作用した。「セルビア人に生まれてこなかったから」という理由で人々は殺された。民族浄化はシンボルに対する、記憶に対する、希望に対する攻撃だった。命を奪われなかった人も、生きていく理由を失ってしまったのだ！¹⁴

こんなグリュックスマンは『リベラシオン』紙にクストリツァ宛ての書簡という形式で「アンダーグラウン

¹³ Serge Regourd: *《Underground》*, Alain Finkelkraut et Jdanov. In: Le Monde, 9. juin 1995.

¹⁴ André Glucksmann: *Guerre en Croatie, guerre en Bosnie, chapelet de tueries culminant à Srebrenica... que n'aura-t-on pas complé avant que nos chefs usent de leurs force! Etc.* Libération 10. juin 1999.

ド」を論ずる。

親愛なるエミール・クストリツァ、あなたの映画は美しく、繊細で、激しく、そして驚くべきものです。わたしは笑い、泣き、感嘆しました。わたしは心動かされ、言葉を失いました。映画館を出て、一人の芸術家が戦争という残虐な非人間性によって自分自身に直面させられたことが、今ひとたび心に残りました。¹⁵

上のよう書き起こし、グリュクスマンは「アンダーグラウンド」をヴォルテールの『カンディード』と比較する。さらに「わたしが待ち望んでいたものは、論説でも、プロパガンダでも、説教でもありません。映画だったのです」と述べ、ドストイェフスキの小説において、「彼の脳味噌に住み着く古ぼけた偏見の山」「いんちき哲学めいた瞑想」—ドストイェフスキの『作家の日記』などに見られる汎スラブ主義、親セルビアの立場を指すのだろう—を剥ぎ取った先になお輝いている文学的創造力を指摘し、「あなたのメディア上での発言は、あなたの映画の価値とくらべればはるかに劣るものです」と指摘する。¹⁶

そのうえでグリュクスマンは「アンダーグラウンド」をこう賞讃する。「あなたは偶像、ユーゴスラヴィア・イデオロギーという信仰の嘘を快活に破壊していきます。(中略)あなたの映画はイメージを紋切り型に対置させ、フォークロア的な議論を手袋を裏返すようにひっくり返します。騒々しいが、心惹かれる楽隊の音楽を通して専制的な地獄をあばき出し、また地方色とマフィアの連帯感を通して人殺しのシステムの永続性を露わにして見せています。」そして「ヨーロッパは『アンダーグラウンド』を観て、大セルビアの殺人狂を嘲り、そして自らの姿をおもしろがることを学ぶべきです」とまとめている。

1.3 ベルナール＝アンリ・レヴィ

ベルナール＝アンリ・レヴィは『ボスニア戦争時の作家の日記』という副題を持つ『バラと遺骸』という本のなかで、やはりクストリツァの映画について言及している。

1995年5月、「アンダーグラウンド」がカンヌ映画祭のグランプリに輝いたことに触れて5月28日付の日記にまず下のような記述が認められる。

¹⁵ André Glucksmann: *L'alambic magistral d'«Underground»*. In : *Libération*, 27. nov. 1995.

¹⁶ ユーゴスラヴィア内戦をめぐって、クストリツァはスロヴェニア独立に際して「スロヴェニアはオーストリアの下僕になりたがっている」とか、また「いたるところで耳にする《大セルビア》という言葉はどまっとく馬鹿げた言葉はない。人口900万の国がどうして《大》などと呼ばれるのだろうか？ その一方で統一ドイツは8000万の人口を抱えて文字通り大国なのに、誰もそのことを指摘しない」などと発言して、物議を醸していた。

エミール・クストリツァ、カンヌ映画祭でパルム・ドール。このニュースを知ったときのボスニアの知識人たちの尊敬すべき反応。彼らはもちろん泣いた。これまでなかったほど世界に打ち棄てられたと感じた。しかし彼らは信じられぬほどの不屈の意志をもってこう語った。「われわれはこの映画をまだ観ていない。きっとこの作品はすばらしいのだろう。そんなことはどうでもよい、こんなに心に傷を負ったときには、こんなに孤独なときには、芸術に栄光を！ 芸術がこのようなかたちでしか聖別されないのだとすれば。」¹⁷

それから約半年たった10月26日の日記に、本格的な「アンダーグラウンド」評が記されることになる。

まずレヴィは「アンダーグラウンド」について判断を下すにあたって、「政治的公正さ」とは関係なくこの映画を論ずることを誓う。「可能なかぎり良心的に、ミロシェヴィチを支持するというこの監督の政治的選択も忘れ、彼が倦むことなくわたしに浴びせかけた侮辱の言葉も忘れて観た。」¹⁸「クストリツァはレヴィを「反ユダヤ主義者」と批判していた(引用者註)」

この映画は、作品を支えるディスコースにもかわらず美しい、というべきだろうか？ いいかえれば、道徳的にいかわしく、政治的にはひどく不愉快ではあるが、その美学によって救われていると？ 「にもかかわらず」ではない。わたしにとってまったく意外なことには、親セルビア的言辞、クストリツァ自身の明確な政治とモラルは、最終的にまさに映像の中身のなかで、ほとんど重みをなしているものではなかったのである。(中略)「アンダーグラウンド」はフィクションである。ドストエフスキの『地下生活者の手記』の自由な変奏である。現実と空想の関係についての寓話であり、嘘や、遡行する時間、父性の美徳、崩れた博愛精神の不可解さについての寓話なのだ。これは戦争というものについてのバロック的臆想である。そう、普遍的でメタフォリックな戦争についてであって、それを現実の旧ユーゴスラヴィアにおける戦争一つに限定してしまうのは、人々の誤解である——この誤解を広めたのは、ほかにならぬクストリツァ自身の数え切れない注釈とおしゃべりなのだ。¹⁹

つづけてレヴィは、作者の政治的立場や発言と作品の「ズレ」について対独協力の廉で訴追されながら名作を物にしたセリーヌの名を引き合いに出し、「ヤヌスの顔」と呼ぶ。

そしてレヴィは次のように結論づける。「作品や真実は、つねにその作者自身より偉大である。偉大

¹⁷ Bernard-Henri Lévy: *Le lys et la cendre*. Edition Grasset & Fasquelle, 1996. p.417.

¹⁸ cf. *ibid.* p.488.

¹⁹ *ibid.* p.489.

な作者はいつも沈黙を守り、作品自身に語らせてきた。クストリツァはその正反対だった。彼は自分の声で彼の映画をおおってしまった。(中略)まとめると、彼は卑劣な、あるいは単純に、無用な言葉の洪水で彼の映画を溺れさせてしまった。(中略)けれどもこの映画はすぐれている、とわたしは思う。なぜならどんな思想信条にも要約されえないもので、パラドキシカルにボスニアとボスニア戦争について考えさせてくれた。芸術家はいつも自分の作品を信用しない、という誤りをおかす。²⁰

以上が「アンダーグラウンド」をめぐる応酬の一部始終である。ハントケの指摘や批判には該当する部分もあるが、こじつけや、一部の記事については触れないなど情報操作も見られる。

とりわけ『ル・モンド』の10月26日付け「アンダーグラウンド」の特集についてのハントケの記述には問題がある。この特集にはクストリツァ自身のエッセイと4本の評論が掲載されている。そのうち一本は配給会社をめぐる舞台裏を解説したもの、また一本はサライエヴォでのクストリツァ評価をめぐるものである。残りの二本はいずれも「アンダーグラウンド」のみならず「アリゾナ・ドリーム」や「パンプは出張中」などクストリツァのこれまでの作品も含めて映像作家としての彼を評価する内容となっている。

そのなかで「アンダーグラウンド」に肯定的な2本の映画評—そのうち一本は、5月30日の記事でその年のカンヌ・グランプリ受賞作品を、まったく公平に、主観を交えず報告した映画評論家ジャン・ミシェル・フロドンの手による—については言及せず、配給会社の問題、とくに「アンダーグラウンド」の撮影がセルビアで行われたことが、国連による経済制裁に違反するかどうかの義論に応えたフロランス・アルトマンの記事のみを槍玉に挙げ、²¹「『アンダーグラウンド』に対して『ル・モンド』の編集部は、エミール・クストリツァと彼の親セルビア、親ユーゴの熱狂振りにケリをつけなければいけないという意見で一致した。」そして、「これまでユーゴスラヴィアの戦争特班員でしかなかった女性が、不屈の義まいまでに自己意識にみちたセルビア的なものすべてへの憎悪を書き綴った記事」と酷評する。²²

この『ル・モンド』の特集号のほかの記事もハントケは読んでいるはずなのに、それらについて彼はいつさい触れない。ハントケが、この特集号全部に目を通していたことは、『冬の旅』で、「フィンキルクロートは、クストリツァの映画を観ることなしに(ohne ihn [Kustricas Film] gesehen zu haben)、『アンダーグラウンド』を批判した」と書いているが、これはこの特集に掲載されたクストリツァ自身のフィンキルクロートへの反論「わたしのペテン」のなかで「あきらかにわたしの映画を観ていない(qui, à l'évidence, n'avait pas vu mon film Underground)この記事の書き手に対して、わたしは反論す

²⁰ ibid. p.490.

²¹ Florence Hartmann: *La production d'"Underground" et ses zones d'ombre*. In: *Le Monde*, 26 octobre 1995.

²² Handke, S.26f.

べき言葉がなかった」という表現をそのまま踏襲していることから明かなはずなのだが……。

2. ペーター・ハントケ『冬の旅』をめぐる

1995年10月から11月にかけて、 Dayton 合意によってボスニアでの内戦がいちおうの終結を見たばかりのセルビアを、ハントケは旅し、翌年1月に紀行文風のエッセイを『冬の旅』と題して『南ドイツ新聞』に発表する。ハントケの旅の意図はきわめて明快である。

とくに戦争のせいなのだ。そのせいでわたしは一般に「攻撃者」といわれているセルビアに行きたい。(中略)過去四年間のあらゆる映像やニュースはほとんど戦線や国境の一方の側から現れ、その間隙を縫ってもう一方から現れても、わたしには時間が経つにつれてますますその傾向は強くなるのだが、それらはおなじみの網膜の単なる反射像、つまりわれわれの視角細胞そのものの歪みに見えた。いずれにせよ目撃者の証言であるとは思われなかった。そのことが、鏡の背後にわたしを追いやったのである。そのことがわたしを、どんな記事や論評でも、どんな分析でもますます分からなくなる国、研究に値し、また単に眺めてみる価値のある国セルビアへの旅へと駆り立てたのである。²³

ハントケは「あまりにも早々と、世界のメディアがこの戦争における侵略者と被侵略者、剥き出しの悪の権化と純粋な犠牲者の役割を割り振り、確定してしまった」ことへの不信をもつ。²⁴ 彼の旅の意図は、自分の目でセルビアの現実を見ることによって、メディアが産出するものとは違うリアリティーを手に入れることにある。ハントケによれば、それこそが詩人の使命なのだ。

ハントケは上の引用に見られるように、クロアチアあるいはボスニア側からの情報のみに基づいた報道 — のちにクロアチアやボスニア側に立った報道 — が、セルビア側から検証されることなくメディアを席捲していくことに違和感を覚える。そればかりか、彼はジャーナリストたちが「自らを裁き手・デマゴーグの役割と取り違え、現実を制度化されたステレオタイプに編成して報道している」として非難する。こうした状況に対して、セルビアの人たちの具体的な日常の営みを描くことで「少しでも均衡をとる²⁵」ことが、彼にとってこの『冬の旅』という紀行文を公にする理由である。

²³ ibid. S.12f

²⁴ ibid. S. 38.

²⁵ „Ich mag nicht gerne theoretisieren oder politisieren, aber Serbien war wahrscheinlich das, was der inneren Leere vieler, die sonst überhaupt kein Engagement, keine Vision hatten, gefehlt hat. – Peter Handke im Gespräch mit Thomas Deichmann.“ In: Thomas Deichmann (Hg.) *Nocheinmal für Jugoslawien: Peter Handke*. Frankfurt. a.M. 1999, 187.

しかし『冬の旅』は発表されるや否や轟々たる非難の渦に巻き込まれることになる。書評の多くは、この作品を文学作品として読まず、ハントケがセルビアに出かけたこと、そしてセルビアを擁護すること自体に対するバッシングに終始した。またハントケがボスニアでの惨状についていっさい触れていないことも批判を呼んだ。戦争の犠牲者、戦禍によって家を失い難民となった人たち、肉親を殺され、飢えと寒さに苦しむ人たち。そうしたボスニア人の悲劇的現実が『冬の旅』にはいっさい登場しない。そのかわり経済制裁のもと細々と生活の営みをつづけるセルビア人の姿が淡々と描かれる。そのことが「砲弾が飛び交い、虐殺が行われているのはボスニアであって、ハントケは戦場でない安全なセルビアを旅しただけである」との非難を招く。

作家ペーター・シュナイダーは、ハントケが「セルビアのための正義」と唱えながら、セルビアが内戦中犯したとされる蛮行に対してなんら反証となるものを挙げていないことを指摘した。²⁶ たしかにハントケは旅の印象を記し、さまざまな出来事 ―その中には「スレブレニツァでの虐殺事件」も含む― について示唆するのみである。とりとめもなくモノローグを綴り、疑問符を付す。そうすることによって出来事を相対化する。そうした文体が「歴史修正主義」と批判されたとしても故なしとはできない。

それに加えて、ハントケは彼の旅の意図に忠実に「本当に」セルビアを旅したのか、という疑問も残る。なぜなら彼がセルビアで出会うのは好ましい人ばかりだからである。「一目見た限りでは、ベオグラード市民は生き生きとしていて道徳的だった。一般的な罪の意識からそうなのか？ いや、深い思慮のようなものから、測り知れない意識から、威厳にみちた集団的離散から、そしておそらくは誇り、それも優越感から来たものではない誇りによるのだとぼくは思う。²⁷」あるいは「いや、彼らはおぼくの目には愛国者にも偏狭な民族主義者にも映らなかった。狂信的宗教の信者にも、王党派にも、かつてのナチ協力者にも見えなかった。またティートのパルチザンにも見えなかった。はっきりしているのは、同じような喪失に苦しんでいること、この喪失は、彼らの暗いまなざしになお生き生きと見られることだけだ。喪失とは何だろうか？ 喪失だって？ 残酷に裏切られたという以外の何物でもないだろうか？²⁸」

こうした文章を読んでみると、ハントケが出会うのは均質で、一様に道徳的なセルビア人たちである。ハントケはセルビアへ、自分の都合のよい人を見つけに行っただけ、という批判もあながち不当ではないように見える。

以下、二人の旧ユーゴの作家、すなわちボスニアの出身のジェヴアド・カラハサンとスロヴェニア出身のドラゴ・ヤンチャルによるハントケの『冬の旅』批判を紹介したい。

²⁶ Peter Schneider: Der Ritt über den Balkan. In: Der Spiegel, 15. Jan. 1996.

²⁷ Handke, S. 58f

²⁸ ibid. S. 60f

2. 1 ジェヴァド・カラハサン「市民ハントケ、セルビア民族」²⁹

カラハサンのハントケ論は、最初2月16日『ツァイト』紙に掲載され、後に『現実を前にした詩人の不安』に収められた。カラハサンは、この一人称形式で書かれたハントケのテキスト『冬の旅』をどのように読みうるのかを五つの問を立てながら論を進めていく。

まず第一に旅行書としてはどうか？「ここでは多くの情報、地図、正確な描写満載のカール・ベデカーがドイツ語圏文学に提供してくれたような有用かつ貴重な旅の描写が目論まれているわけではない。」したがって、われわれはこのテキストを旅行記としてではなく、むしろ芸術的散文として読むべきではないか、とカラハサンは述べる。

あるいは第二の可能性として「道徳的パンフレット」として読むことは可能ではないか？なぜなら「正義」というタイトルはただちにゾラの「我れ糾弾す」を連想させるからである。しかしハントケ自身の但し書きを俟つまでもなく、二つのテキストを読めば、両者の相違点は一目瞭然である。なぜならゾラはドレフュスという具体的な人物を無実の罪に問われた具体的な事件に際して弁護したのに対し、ハントケは戦争に加担しているとされるひとつの国まるごとを弁護している。ゾラが道徳、そして倫理的理念に基づいて行動したのに対して、ハントケの場合は道徳について語られることはなく、かわりに政治がある、とカラハサンは言う。ゆえにこのテキストは「道徳的パンフレット」ではない、と結論づける。そもそもハントケは戦争犯罪人の汚名を着せられているセルビア人を一括りにして扱っているが、彼が守ろうとするセルビア人とは何か？誰に対してセルビア人を守ろうというのか？脅迫を受けて生地ベオグラードを去らねばならなかった建築家で作家のボグダン・ボクダノヴィチのような人物か？戦時下もずっとサライェヴォで本を出版しつづけたカヴリロ・グラホヴァチか？現実に戦場で虐殺行為に手を下している具体的な名前を持ったセルビア人たちの責任をあっさり「セルビア人」一般に転嫁するハントケの身振り、そして罪、責任、正義といった道徳的概念を集団に適応するハントケのやり方にカラハサンは嫌悪を覚える。多くのセルビア人が「セルビア人の名において」犯された犯罪とは区別されるべきなのに、殺人や破壊行為を、匿名かつ一括りなものにしてしまうハントケの試みは「論理的混乱であり、道徳的ニヒリズムだ」とカラハサンは断罪している。（この段でカラハサンはスレブレニツァの虐殺についてのハントケの態度を批判している。すなわち、ハントケは虐殺自体は否定しないが、その報道ぶりに疑義を呈することで論点をずらす。「顔が醜いからといって鏡の責任ではないことを、作家ハントケにどう説明したらよいのだろう？」）

第三の可能性として、旧ユーゴにおける戦争についてのエッセイもしくは論考として読むことはで

²⁹ Dževad Karahasan: Bürger Handke, Serbenvolk. In: Tilman Tülich (Hg.) *Die Angst des Dichters vor der Wirklichkeit – 16 Antworten auf Peter Handkes Winterreise nach Serbien*. Göttingen 1996. 41–53.

きないだろうか、とカラハサンは問う。ハントケ自身、先に紹介したとおり偏った報道がなされているこの戦争について直接自分の目で見てみたい、という欲求を抱いたのが旅のきっかけだった。しかし彼は戦場であるボスニアではなくセルビアを旅したのだった。「それはアルジェリア戦争について知るためにフランスに出かけ、マルセイユで沈黙考し、家に帰ってきて暴力的なテキストを書いたようなものだ。」けれども、そのような方法の旅からであっても事の核心に触れる可能性はあっただろう。けれども残念なことにランゲンシャイトの辞典を携えたハントケは現地の言葉を一言も知らず、この地方の文化についても歴史についても、ごく最近の過去についての事実も知らない。たとえばボスニアの独立の経緯について述べた箇所がその証左である。またハントケはムスリム人を「民族」と見做さないが——「セルボ・クロアチア語を話し、セルビア系のボスニアのムスリムがひとつの民族だったとして」という言い方をハントケはする——、だったらなぜ20万ものムスリム人が虐殺されねばならなかったのか？という矛盾にハントケは答えられない。ハントケは『ツァイト』紙のインタビューで、ボスニアの人々が憎しみあうのは理解できる、と答えた。「どうしてこのことがハントケにとって『理解できる』ことなのだろう？ どうして彼は理解できるのだろうか？ ボスニア人はそういう連中だから、というのか？ 彼らの国はそういうところだからなのか？」こうした、旧ユーゴに対する本質的無知ゆえ、カラハサンはこのテキストを旧ユーゴでの戦争についてのエッセイまたは論考と見做すことを拒否する。

第四に、カラハサンはこのテキストをバルカンでの戦争についての数々のコメントへの反論として読む可能性を検証する。しかしここには個々の名前が槍玉に挙げられているだけで——その具体例をぼくたちは第一章で見てきたわけだが——、その意見や発言の内容が具体的に引用された箇所は一つもない。反論とは、元の議論の主旨が明確にされてはじめて有益になるものである。ゆえにこのテキストは「ハントケの神経衰弱の日記かもしれないが、反論ではない。」

第五に旅行記の形式を借りた芸術的散文として読んでみたらどうか？ なるほどこのテキストの中には語りである主観による唯一の声、唯一の見方が存在するのみである。語り手と比肩できるような人物は登場せず、語り手によって客観化される出来事も起こらない。どのような方法でか語り手や彼の世界との関係を具体化するようなものは何一つない。ただひたすら話者が語りつづけるばかりである。人物は群集としてしか登場せず、しかも「ネクタイを締め、帽子を被り、バルカン風の比率でひげを剃っていた」といった描写によって類型化されている。そもそもどの程度割れば「バルカン風比率」になるのか……。

ほかにもハントケが対象世界を自らの語りに隷属させている例として、カラハサンはドリナ川の岸辺のシーンを挙げている。スレブレニツァから30キロほどしか離れていないボスニアとの国境の河の岸辺にハントケは佇み、セルビアについて、ユーゴスラヴィアについて思いをめぐらせる。そして冬の河に手をひたす。すると、河を一足の子供のサンダルが流れてくるのだ。

こうした例は枚挙に暇がない。結局ここには語り手の主観のおしやべりしかない。最後にカラハサ

ンはショーペンハウアーの言葉を引用して文章を閉じている。「文学において悪は役に立たないだけではない。はっきりと有害である。」

2. 2 ドラゴ・ヤンチャル『長く包囲された都市に関する短い報告あるいはサライェヴォのための正義』³⁰

スロヴェニアを代表する作家ヤンチャルは、ハントケの著作をもじったエッセイにおいてユーゴ各地を『冬の旅』を朗読しながら旅するハントケの姿を批判する。問題点は、彼が伝道師・宣教師としてユーゴを訪れたこと、それも信仰からではなく、インスピレーションに導かれてやってきたこと、すなわち詩人＝見者にのみ与えられた深い認識力に駆られて訪れたという点だ。旅の風景、報道される映像や情報のどれを信じるかは見者である詩人にしか分からない。詩人がドリナ河に手をひたしたとき、読者はハントケと共に、誰が攻撃側で誰が被害者なのか、誰が犯罪者の刻印を刻まれている誰がそうでないのか、理解しなければならない。「ハントケの伝道の旅は、文学的にも道徳的にもおそろしく空虚な土台に基づいたもの」で、そうしたハントケが虚像を振り撒くには怒りを通りこして憂鬱になる、とヤンチャルは書く。³¹

かつて詩人は、宣教師ではなくたんなる詩人であった。ところが1991年のスロヴェニア独立に際してハントケは、『第九の国からの夢想者の別れ』という短いパンフレットを著して、スロヴェニアのユーゴスラヴィア連邦からの分離独立を激しく非難する。「いや、ユーゴスラヴィアのなかのスロヴェニア、ユーゴスラヴィアとともにあるスロヴェニアであるべきなのだ。おまえはそこを訪れるものに対して、南でも東でもなく、いわんやバルカン的でもなかった。むしろ別の第三項、あるいは『第九』の存在、名づけえぬもの、けれどもメルヘンのような現実であって、一歩歩むごとに スロヴェニア、わが訪問可能なふるさとをおまえを通して・める固有の現存在があった。(下略)」³²

ハントケはタイトーのユーゴを顕彰し、旧ユーゴに現れた民族調和の理念が連邦解体で損なわれたと言う。それが辛うじて残された国としてハントケは『冬の旅』のなかでセルビアを認識する。(しかしなぜ『セルビアのための正義』であって『セルビア人のための正義』ではないのか?)

ハントケにとって旅すべき場所は、むしろボスニアではなかったか、とヤンチャルは問う。あることに対する関連の中で誰かにとっての正義を語るならば、賞讃されることもなく「第九の国」でもない、おそろしい暴力が渦巻き天に届かんばかりの不正義にあふれているボスニアを旅することが必要で

³⁰ Drago Jančar: *Kurzer Bericht über eine lange belagerte Stadt oder Gerechtigkeit für Sarajevo*. Klagenfurt, Ljubljana, Wien, 1996.

³¹ *ibid.*, S.94f.

³² Peter Handke: *Abschied des Träumers vom Neunten Land* Frankfurt a.M. 1991. 17f.

はなかったのか、と。むしろそうしたボスニア、サラエヴォにおいて「ティトーの国」を見出すことができたのではないだろうか？

『ゴドーを待ちながら』を上演するためにサラエヴォを訪れたヤンチャルによれば「その上演はスーザン・ソントグのものとは別——「サラエヴォは複数文化の町ではなく、ムスリム、クロアチア、セルビアの三つの文化が総合された町なのである。そして三つの文化の総合は複数文化を生んだのではなく、平等を生んだ。それぞれの宗教が自由に生きることができる民主主義と自由を育んだ。友情に裏打ちされた風刺芸術、ポピュラー・ミュージックもスポーツも、目に見えない境界や差異を克服しようとして、しばしばそれに成功した。」³³

そして包囲下のサラエヴォで問題になったのは、セルビア人のための正義——サラエヴォにはセルビア人も多く暮らしていただけではない、そこに暮らすすべての人の生きる権利だった。

ヤンチャルはハントケのセルビア紀行そのものを論じるのではなく、ハントケの思考が開きえたはずの別の地平をサラエヴォという町の滞在記を紡ぎながら展開したのだった。

結語

以上、ハントケの『冬の旅』というテキストの周辺でなされた議論を概観しながら、ハントケのテキスト、あるいは作者ハントケ自身の持つ問題性を逆照射することを試みた。最初に述べたとおり、本論は『冬の旅』それ自体を批判的考察の対象にしたものではない。あくまで論争を通して浮かび上がってくる当時の時代背景や精神構造を浮き彫りにすることであった。当時の報道機関の反セルビアぶりは想像を絶するものがあり、それに対してハントケが反撥をおぼえたのも当然であろう。そして、そのハントケが『冬の旅』を発表したことで各種メディアから袋叩きにあったのも、当時の雰囲気からいえば避けられない状況だった。

ハントケはユーゴスラヴィア内戦やセルビアを論じるにあたって、いわゆるイデオログのように振る舞いはしなかった。また、ラドヴァン・カラジチにインタビューまでしてしまうパトリック・ベッソンのような単線思考の「親セルビア」作家³⁴でないことも明らかである。にもかかわらず論戦において、結果として文学作品としてではなく、ハントケの振る舞いそのものが批判の俎上にあがってしまったことに、彼自身のエクリチュールに責任がなかったとはいえないだろう。別のところで触れたことであるが、³⁵

³³ ibid. S.38f.

³⁴ パトリック・ベッソンについては、Partick Besson : *Belgrade 99 suivi de Contre les calomniateurs de la Serbie*. Lausanne, 1999 および同じ作者が編者をつとめる *Avec les Serbes*. Lausanne, 1996 を参照。

³⁵ 拙論『ユーゴスラヴィアと西欧のバルカン像——ユーゴスラヴィア内戦を通して見えてくるもの』（『二十世紀研究』第三号（二十世紀研究編集委員会、2002年12月））参照。またハントケの近作に認められる「故

かつて『サント・ヴィクトワール山の教訓』や『反復』などでユーゴスラヴィアが語られるとき、つねに語り手はいったん虚構化の作業を踏んで、ハントケ自身から文学上の「話者」に昇華されていた。ところが『第九の国からの夢想者の別れ』あたりからのハントケの発言は、あまりに生々しく現実の政治状況と癒着する。『冬の旅』が文学作品としてではなく、政治パンフレットとして読まれた遠因はそこにあるのではないかな。

ほとんどの結語を記すなら、ベルナール＝アンリ・レヴィがクストリツァについて述べていることがそのままハントケにもあてはまるように思う。すなわち作品はつねに作者自身より偉大であり、作者は作品自体に語らせるべきであった。ハントケの『冬の旅』、そしてその後の論争において、作者は自分の声で文学作品をおおってしまった。ハントケは自分の文学をもっと信じてよかったのではないだろうか。

郷の実体化」については山本浩司『虚構としての故郷—《牧歌》と《地獄》のあとで』（初見基編《戦後文学》を越えて1989年以降のドイツ文学（日本独文学会、2001年）を参照（とくに62～66頁）。

Der Bürgerkrieg in Ex-Jugoslawien und westeuropäische Intellektuelle – Die Debatte über „Eine winterliche Reise“ von Peter Handke –

KUNISHIGE Yutaka

Die vorliegende Arbeit befaßt sich nicht mit der Interpretation des im Jahre 1996 erschienenen Buches „Eine winterliche Reise zu den Flüssen Donau, Save, Morawa, und Drina oder Gerechtigkeit für Serbien“ von Peter Handke, sondern mit der Debatte über dieses Buch selbst, das das öffentliche Ärgnis erregte; genauer gesagt, es wird ein Versuch unternommen zu erklären, wie westeuropäische Intellektuelle den Bürgerkrieg in Ex-Jugoslawien kommentiert hatten, dabei gefragt, was das besonders Eigentümliche bei den Bemerkungen Handkes gewesen war.

Der erste Kapitel thematisiert die Diskussion über den Film „Underground“ von Emir Kusturica. Die Artikel auf „Le Monde“, „Liberation“ u.s.w. von der sogenannten „nouveaux philosophes“ (Allain Finkielkraut, André Glucksmann, Bernard-Henry Lévy) machen uns klar, welche Interessen sie über Ex-Jugoslawien hatten, und als Peter Handke sie in seinem Werk scharf kritisiert hat, war ihr Unterschied klar gemacht. Im Kontext meiner Arbeit wird deutlich, daß wegen der willkürlichen Zitate Handkes aus den französischen Philosophen seine scharfe Kritik an ihnen und der Weltöffentlichkeit weder überzeugend noch gültig ist.

Das zweite Kapitel widmet sich zwei Kritiken der ex-jugoslawischen Schriftsteller Dževad Karahasan und Drago Jančar. Karahasan zeigte die vielen Widersprüche in Handkes Buch auf und kam zu dem Schluß, daß dieses nichts als eine subjektive launische Plauderei sei. Jančar schrieb einen Essay über die lange belagerte Stadt Sarajevo, während Handke nur in Serbien, d.h. nicht an Orten des Krieges und der Not gereist war. Deshalb kann man Jančars Buch lesen als eine Version des von Handke nie geschriebenen Buches.

Es ist sicher, daß „eine winterliche Reise“ nicht im Allgemeinen als Literatur gelesen war, sondern als Pamphlet. Dafür trägt Handke selbst die Hauptverantwortung;

Handke schrieb viel zu personal und lebhaft über die Realpolitik, und dies ohne Poetisierung, die er in „Der Lehre der Sainte-Victoire“ oder „Wiederholung“ verwirklicht hatte. Der Mangel an poetischer Anstrengung schadete auf verhängnisvolle Weise den schönen Reisebeschreibungen. Bernard-Henry Lévy meinte: Un artiste a toujours tort de ne pas avoir confiance en ce oeuvre. Handke auch.